

# 第1部

## 調査の概要

# 第1部 調査の概要

## 第1 調査の目的

本県における青少年の意識や行動を把握して、青少年に関する施策の総合的な推進のための基礎資料を得るとともに、得られた結果を広く県民に紹介することにより、青少年の健全育成に対する理解と協力を得る。

## 第2 調査の方法

質問紙とインターネットの併用による無記名調査

## 第3 調査の対象

小学校（16校）、中学校（16校）、高等学校（12校） 計44校

小学校6年生 384人（男子201人、女子183人）  
中学校2年生 380人（男子220人、女子160人）  
高等学校2年生 354人（男子192人、女子162人）  
計1,118人（男子613人、女子505人）

## 第4 調査の実施期間

令和4年8月から令和4年9月まで

## 第5 調査項目

### 1 地域のこと

住んでいる地域への評価、住んでいる地域が好きな理由、地域の大人へのあいさつ、地域の大人からのあいさつ、地域活動への参加、ボランティア活動への参加

### 2 学校のこと

学校生活への満足度、学校生活が楽しい理由

### 3 家族・家庭のこと

家族・家庭への評価、家族との会話の頻度、家族との行事の頻度、お手伝いの頻度、家族との人生や将来の会話の頻度、家族との約束ごと、家族や家庭に大切なもの

### 4 自分のこと

自己への評価、きまりやルールへの評価、自然への感動、芸術への感動、自身への思いやり、他人への思いやり、命について、家族や社会への関わりについて、小さい子の面倒見について、居心地のいい場所、悩みごと、悩みごとの相談相手、相談しない理由

### 5 新型コロナウイルス感染症流行下の心の状態

コロナ下の心の状態

### 6 メディア・コミュニケーションのこと

友だちとのコミュニケーション方法、携帯電話・スマートフォン等の所有状況・使用目的、SNSの利用目的、インターネットの利用時間、フィルタリング機能の認知状況・利用状況、年齢制限のあるサイトへのアクセス状況、悪口やいじめにつながる書き込みの閲覧状況・閲覧場所、睡眠不足などの影響、インターネットで知り合った人とのメール等のやりとり、インターネットで知り合った人と実際に会う、インターネットで知り合った人への個人情報送信、家庭でのインターネット利用ルール、インターネットの危険性の学習

## 7 読書のこと

読書への評価、1日の読書時間、1か月の読書量

## 8 世の中のこと

世の中の出来事についての会話

## 9 就労に関する意識

将来の就労意識

## 10 社会の価値観の変化に対する意識

社会の価値観の変化に対する意識

## 第6 調査の監修

弘前大学教育学部教授 田名場 忍 氏（青森県青少年健全育成審議会長）

## 第7 時系列比較について

この調査報告書では、下記（5種類）の調査結果との比較分析を行っている。これらの調査は本調査と同様に、平成24年度、26年度、28年度、30年度、令和2年度に実施したものである。

それらの結果と照合して、共通質問を行った部分について比較を試みた。

それぞれの調査概要は次のとおりである。

### 1 平成24年度「青少年の意識に関する調査」結果報告書

#### (1) 調査対象者

県内の小学校6年生、中学校2年生、高等学校2年生

#### (2) 有効回答者数

児童・生徒1,300人

#### (3) 調査実施期間

平成24年6月～7月

### 2 平成26年度「青少年の意識に関する調査」結果報告書

#### (1) 調査対象者

県内の小学校6年生、中学校2年生、高等学校2年生

#### (2) 有効回答者数

児童・生徒1,296人

#### (3) 調査実施期間

平成26年8月～9月

### 3 平成28年度「青少年の意識に関する調査」結果報告書

#### (1) 調査対象者

県内の小学校6年生、中学校2年生、高等学校2年生

#### (2) 有効回答者数

児童・生徒1,241人

#### (3) 調査実施期間

平成28年8月～9月

#### 4 平成30年度「青少年の意識に関する調査」結果報告書

- (1) 調査対象者  
県内の小学校6年生、中学校2年生、高等学校2年生
- (2) 有効回答者数  
児童・生徒1,274人
- (3) 調査実施期間  
平成30年8月～9月

#### 5 令和2年度「青少年の意識に関する調査」結果報告書

- (1) 調査対象者  
県内の小学校6年生、中学校2年生、高等学校2年生
- (2) 有効回答者数  
児童・生徒1,266人
- (3) 調査実施期間  
令和2年8月～9月

### 第8 集計結果の見方

- (1) 基数となるべき実数(N)は、設問に対する回答者数である。
- (2) 各集計結果の「%」は小数点第2位以下を端数処理しているため、数値の合計が100にならない場合がある。
- (3) 複数回答の集計結果を表すグラフの場合、「%」は選択肢の構成比を表すものではなく回答のあったサンプル数に対する割合を表すため、すべての比率を合計すると100を超える場合がある。